『狭衣物語』におけるうるはし

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>北村 英子</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>樟蔭園文学</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>45</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2008年3月1日</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://id.nii.ac.jp/1072/00004612/">url</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
狭衣物語

における "うるはし"

狭衣物語」は、源氏物語を源々とし、源氏物語の影響下にあると思われる箇所がある。

一方、この一節においては「うるはし」という語の意味や用法など

を数えるのが、新潮日本古典集成「狭衣物語」などでは七個を数える。

本稿においては、「うるはし」の数が多い。

新潮日本古典集成「狭衣物語」を用いて検討する。

①果の声々に近づくに、紫の雲たなびきたりと見ゆるに、

ひんやり結びけ言ひ知らずをかしける童の

うるはしを、中将の君にうち掛けて袖を引きまぶに、絵遊が何ぞと見

しくたるかうばしきもの、ふと降り来るまやに、絵遊を引きたまぶに、とも

あり、「絵遊あるはしくしたる」の本題の部分が欠けています。
この用例の場面は、中将が帝に強要されて吹いた笛の音に魅せられて、天権御子天降るという内容の箇所である。天権御子の装束についての比較に結びつけて何とも言いようなくかわいらしい角髪に結って何とも言えなくなる可愛らしく、装束は端正にしてかくわしい香りがする童が、不意に降臨してきたのである。

「うるはし」はこういった崇徳の宮にある天権の御子、天権御子の装束が乱れても、端正で正統なものにすら見られ、自然の乱れたままの装束ではなく、手を加え整え上げた姿をいう。こういった装束の着用に関して「うるはし」を用いている例は、先行文学に多くみられる。

例えば、元結固めすともありなり。ところでおぼれ。《枕草子》をみてこう。

・営務が、三々にひらめく日の出の如きに、見るるはし
・営務は、五日ばかりない東上のある、いとをかげ

・営務の出前も、上に、五寸ばかりになる殿上重の、いとをかげ


昨日は車一つにあきまつ乗り、二部のと同じ指貫、あるは狩衣術が乱れて、厭だれ解きおろし、もの狂はしちままで見えし若達の、駄院の殿下にとて、日の装束まるはしようにして、今日は、一人つつさうしよく乗りたる後に、かしこめなる殿上童乗せたるもかし。

君はなよそのなる薄色どもに、撫子の細長重ねて、うち乱れたまへる御用さるの、何ごともいいとけるはしくこととしきまで盛りなる人の御装び、何くれに思いきらずぶと、け劣りてもおばりにならぬかし。

《宿木》へ、心得ぬまで好みしたまへ。

宮、日たてて起きたまひて、《宿木》下の宮、例の、なやましくしたまへば、参るべし」とて、御装束とどしたまへけておは。

ゆかしあおぼってのがれはうるはしくひさくらひたまへる。は、似るものなく気高く敏事をきよくからにて、若君をえ見乗せたまでは遊びおは。
このように、装束しを「うるはしきよりも」の部分が「うるはしき御姿よりも」となり、「うるはしきよりも」の部分が「うるはしき御姿よりも」となっておりわかりやすい。すなわち、中将は装束をくつろいだままで参上なさった。髪のあたりも別に整えずに、無造作なおくつろぎの姿が、装束をきちんと整えた姿よりも、かえって、このようにくつろいだお姿も見栄えがし、立派に見えるというのである。装束をきちんと整えた姿に対して用いられる。「うるはしきよりも」は高貴な身分である中将の装束姿、乱れてもなく整った姿のあたまりに別に整えずに、無造作なおくつろぎの姿、あるいは、髪のあたりも別に整えずに、無造作なおくつろぎの姿に着用していることを指す。したがって、「うるはしきよりも」は端っという意味で、手を加え整え上げた姿に対して用いられる。「うるはしきよりも」を「うるはしきよりも」と同じような内容の描写が『源氏物語』にもある。このように、髪のあたりも別に整えずに、無造作なおくつろぎの姿に着用していることを指す。したがって、「うるはしきよりも」と同じような内容の描写が『源氏物語』にもある。このように、髪のあたりも別に整えずに、無造作なおくつろぎの姿に着用していることを指す。したがって、「うるはしきよりも」と同じような内容の描写が『源氏物語』にもある。
の物語にみられる。翁が皇子に感動をこめて、金銀玉を照り輝いている荘厳の玉の枝は「不思議なほど立派で素晴らしい物にもと、最高の誉め言葉用いて言上している。もう少しはよくとりわけ一番、「おほえざき」とあり、天稚御子を別格に扱い絶讃している。したがって、「まことにうるししく、めでたかりし容貌よ」と断定の方針が定まっている。

また、容経を「まるはし」という語を用いた絶讃している例は、先行作品に数多く見当たる。先ず「古事記」である。

中巻(1)

げにの、容経は「まるはし」という語を用いた絶讃ている。容経の中には、行ひやくれますますことあり、手習い

いとし、容経は「まるはし」という語を用いた絶讃している。容経の中には、行ひやくれますますことあり、手習い
壁をなめし色を録っている。

異文の「うるはしきく」の「めでたうて」の方は、「うるはしきく」と「めでたうて」いうように思える。

このように考察してくると、本用例の場合、「容観」の言葉を表現する言葉は、「うるはしきく」の「めでたうて」の「うるはしきよらなれば」のつかり方により、一つの意味を表すことができる。

完璧な言葉の、完璧な美しさを高める。そのつらさは、「うるはしきく」の「めでたうて」の「うるはしきよらなれば」のつかり方により、一つの意味を表すことができる。
「贺茂神社の相営祭祀、庭火に映える御神楽の夜、人長が『その駒』を舞って、片袖を脱いであたかも奇をなす人長に呼ばれて、才会を披露する人達を次々と呼び出すので、指名された若い殿上人などではできてしまっていた。われわれは、ひといでしょう！と、見せつけると、人々は、おおっ、と叫ぶ。引き出させ、いとろは、と、と、ふふふ、と、人々は、と、と、と。

この部分は、『ちがひて愛敬づきてもまごなどもあり』、両者は対極関係にある。つまり、『うるはし』は、『おとどけの所作』の対義語と考え、『堅苦しくふるまる』と文脈上現代語訳出来る。

結局、賀茂社頭の相営祭の行事の夜である。人長に才会を披露するため指名され呼び出されるので、若い殿上人などはひこんで見てしまう。大抵、堅苦しくふるまるって帰る者もあり、おとどけの所作をする者などがあって、面白いという内容になる。

次は六番目の用例である。

⑥『賀茂社』『光失する心地こそせめ照る月の霊隠れゆくほどを知る。

巻四の冒頭部分である。堀川の大臣の夢に賀茂の明神が顕現して、衣に色とりどりに入った人々を見て見た夢を伝えて、うちおどろきたまへ殿の御心地、夢現ともおぼわかれず、

（下・巻四・八七良）
装の礼服をきちんとしていることが、一日の装束であるとはしあ
てと表現している。

もっとも、一日の装束、という言葉を用いないなくても、東洋の正装
を「正装」と捉えている例は所々見当たる。

人のかまげすかしたままでおはせずと中納言も思うので、さるべ
きょうに聞かされたふところ、内裏より、中宮の御詔に述べて、
宰相の御書の御書、これをことしとし随身ひき連れてうるはし
さして参ったべし。

（総角）

宮、日たけて起きたまひて、白宮、二の宮、例の、なやましく
したまへば、参るべし、と、御装束なしとまへておはす。

ゆかしはおほぼえのぞけは、うるはしくひつようひたまへる、
てま末はで遊びおはす。

とあり、白宮の御装束が東洋の表着に、冠、指貫の衣冠装束という
正装が、形式張って品格美に満ちあふれ、改まってきらんとして
在る文献の中の「おはしけさまして」とは「きちんととした束帯の正装
をし」と訳することは、文字に適用。
次の用例にもみられる。

張ってきちんと着用している。気高く崇高感あふれる賀茂の明神に
対して「おはし」と用いられている。

神様に対して「おはし」を用いる例は、すでに『古事記』から
みられる。

故、詔詔たまひし命の随に須佐之男命の御所に到られてば、其の
女須勢理毘売にて見て、目合しで相婚いたまひて、遙かに入れて、

軽く其の父に日出して言へば、『麗しき神来ましと』とまをしらし、

 Moorに其の大神出て見て告げたまはく、「此は春原色許男命と謂
ふぞ」とのりだまひて、即ち喚び入れて、其の蛇の室に寝しめ
たまひき。

とあり、『麗しき神来ましと』は「非常に立派な神様がいらしゃ
る」と訳が出来、「麗し」とは神を称称する言葉として用
いられている。

この他、神仏に関するものに「おはし」を用いた例は案外多く
あり、尊厳で汚れない神様に対する最高的讃辞として使われてい
る。

今の場合も例外ではなく、賀茂の明神という神々しい姿の人が、
日の装束をきちんと着用した乱れのない尊厳で清浄感がありあふ
れた崇高美に対して、「おはし」という讃辞が用いられている。こ
ういた用法は、古く「古事記」の時代から「源氏物語」の時代へと継承され、そしてこの「狭衣物語」の時代へと、脈脈と受け継がれてきているのである。

次は七番目の用例である。

「宴衣小」「いつまでと知らぬかながめの庭流うたたあはで

・やがて出で立ちたまはむとする。心やすく対面もあらさるむ

もとみ、今までの調査の及ぶ限りにおいては、「あるのはしき心

はしき心」という例は数多くある。「源氏物語」に、

「讃情・三三・三三四」

狭衣が東宮の前で式部卿の宮の姬君に文を書くという場面中に、

「といふのはしく気高き御心はへなるに」とあり、東宮という高貴な品格の高い人柄に対して「あるはし」と用いられている。当該箇所を文脈に沿って現代語訳すると、「今日非常にきつことした上品なこ性格でいっしょが」となる。また、今までの調査の及び限りにおいては、「あるのはしき心

・次「それはまち。しかるべき前の世の御御にこそはしまし

へ」とあり、延野という品格のある高貴な人の性格を「あるはし」という語で表している。

また、「大鏡」に、

延野（延野）の御御を「あるのはし」と称称ししている。すなわち、最高位の男性の生前の品格のある御御、

気立てが特に勝っている心現象を表す。

この他にも、高貴な内情のある人物の性格・性質・気立て・人柄

など堅密な場合はしとして生見目で、融通性に欠ける場合に「ある

「あるのはし」と用いられている例が所々に見受けられる。
したがって、形においても例外ではなく、格式のある高貴な男性の、東宮という身分に相応しく堅苦しいきらいとした、生真面目で品格が備わった性格に対して「うるはし」は用いられる。このように検討を加えると、王朝文学においては、高貴な人物に品格ある堅苦しいきらいとした、融通性に欠ける性格に対し、「うるはし」は用いられる。

因みに、新編日本古典文学全集の当該箇所はほぼ同文である。

やがて、「狭衣物語」の「うるはし」については検討した結果、神に神の四則が該当する。この内①③④の三者は神道界に関し、⑤は神楽の関し害虫の神、明神が日の装束を着用して形を現身する。その着装があちこちに神威を満ち、崇拝されるには、神楽物語が用いられている。

崇拝されることを考慮に入れて、神楽物語の時代になり、貴族文学である「源氏物語」においては、人間と世界で、人間でありながら、人間離れした人間を描いた「古事記」あたりの影響下にあると考えられる。

したがって、「うるはし」の用法も、基本的には「古事記」の流れを汲みながら、平安文学中に採択し、広がりを見せていく。そして、格式ある上流貴族の堅苦しい姿に対して基本的には用いる言葉である。

【注】
（9）北村英子『枕草子』の語調——「うるはし」（襟裳国文学十二号）に引く。
（10）北村英子『源氏物語』における「うるはし」（大鏡）における「うるはし」（襟裳国文学第三十八号）に引く。
（11）北村英子『源氏物語』の源氏物語における「うるはし」（大鏡）における「うるはし」（襟裳国文学第三十八号）に引く。
（12）北村英子『源氏物語』における「うるはし」（大鏡）における「うるはし」（襟裳国文学第三十八号）に引く。
（13）北村英子『大鏡』における「うるはし」（襟裳国文学第四号）に引く。